第35号（学会特別号）　2022年2月1日発行　ISSN 1342-1433 Rigakuryôhô Fukuoka

理学療法 福岡

学会特別号

Journal of Physical Therapy
FUKUOKA No.35 Suppl 2022
FUKUOKA PHYSICAL THERAPY ASSOCIATION

第31回 福岡県理学療法士学会

［ 学会テーマ ］

理学療法の再考

日　時：Live配信　2022年2月13日（日）9時30分開始 17時終了予定

会　場：Web開催（Web学会URL　https://gakkai.fukuoka-pt.jp）

公益社団法人　福岡県理学療法士会
http://www.fukuoka-pt.jp/

第31回福岡県理学療法士学会 スケジュール

日時：Live配信　2022年2月13日（日）
場所：Web開催

テーマ「理学療法の再考」

	Room1	Room2	Room3	Room4	Room5	Room6	Room7
9：00 9：10 9：20	オンライン受付						
9：30 9：40	9:30～9:50 開会式						
9：50 10：00 10：10 10：20	9:50～10:20 **学会長講演**						
10：30 10：40 10：50 11：00 11：10 11：20 11：30 11：40 11：50	10:30～12:00 **特別講演1** 村木　孝行 氏 整形外科疾患の再考 －バイオメカニクスの知識を患者に活かす－	10:30～12:00 **特別講演2** 山上　徹也 氏 認知機能に対する理学療法の再考	10:30～12:00 **教育講演** 松田　憲亮 氏 理学療法研究のすゝめ －症例報告編－	10:30～12:00 **web演題セッション1** 神経・生活環境支援 （7演題）	10:30～12:00 **web演題セッション2** 内部障害1 （7演題）	10:30～12:00 **web演題セッション3** 運動器1 （6演題）	10:30～12:00 **web演題セッション4** 運動器2 （6演題）
12：00 12：10 12：20 12：30 12：40 12：50 13：00 13：10	12:10～13:10 **ランチタイムセミナー1** がん理学療法を再考する －理学療法士はがんとどう向き合い何をすべきか－ 広田　桂介 氏 矢木健太郎 氏 音地　　亮 氏	12:10～13:10 **ランチタイムセミナー2** 超高齢社会における理学療法の再考 －加齢性変化を理解した理学療法介入とは－ 齊藤　貴文 氏 松崎　英章 氏 髙野　吉朗 氏					
13：20 13：30 13：40 13：50 14：00 14：10 14：20	13:20～14:20 **セレクションセッション1** 優秀演題 （4演題）	13:20～14:20 **セレクションセッション2** Young Investigator Award （4演題）	13:20～14:20 **セレクションセッション3** Case Report Award （4演題）	13:20～14:20 **セレクションセッション4** Young Case Report Award （4演題）	13:20～14:50 **web演題セッション5** 神経・物理療法 （7演題）	13:20～14:50 **web演題セッション6** 運動器3 （6演題）	13:20～14:50 **web演題セッション7** 運動器4 （6演題）
14：30 14：40 14：50 15：00 15：10 15：20 15：30 15：40 15：50 16：00 16：10 16：20 16：30	14:30～16:30 **シンポジウム1** 下肢関節疾患の再考 －病態×バイオメカニクス－ 藤田　　努 氏 緒方　悠太 氏 高橋　　誠 氏	14:30～16:30 **シンポジウム2** 理学療法の再考Ⅰ －これまでとこれから－ 日本基礎理学療法学会　河上　敦介 氏 日本神経理学療法学会　高村　浩司 氏 日本小児理学療法学会　小塚　直樹 氏 日本地域理学療法学会　大垣　昌之 氏 日本予防理学療法学会　牧迫飛雄馬 氏 日本支援工学理学療法学会　松田　雅弘 氏	14:30～16:30 **シンポジウム3** 理学療法の再考Ⅱ －これまでとこれから－ 日本運動器理学療法学会　対馬　栄輝 氏 日本スポーツ理学療法学会　相澤　純也 氏 日本呼吸理学療法学会　玉木　　彰 氏 日本循環器理学療法学会　高橋　哲也 氏 日本糖尿病理学療法学会　井垣　　誠 氏 日本理学療法教育学会　日髙　正巳 氏		15:00～16:30 **web演題セッション8** 内部障害2 （7演題）	15:00～16:30 **web演題セッション9** 運動器5 （6演題）	15:00～16:30 **web演題セッション10** 運動器6 （6演題）
16：40 16：50	閉会式準備 16:40～17:00 表彰式・閉会式						

【学会長講演】9：50～10：20

テーマ「理学療法の再考－未来に向けて整理すべきこと－」
講 師：河上　淳一 氏（九州栄養福祉大学）
座 長：久保田勝徳 氏（桜十字福岡病院）

【特別講演１】10：30～12：00

テーマ「整形外科疾患の再考－バイオメカニクスの知識を患者に活かす－」
講 師：村木　孝行 氏（東北大学病院）
座 長：河上　淳一 氏（九州栄養福祉大学）

【特別講演２】10：30～12：00

テーマ「認知機能に対する理学療法の再考」
講 師：山上　徹也 氏（群馬大学）
座 長：松﨑　哲治 氏（専門学校麻生リハビリテーション大学校）

【教育講演】10：30～12：00

テーマ「理学療法研究のすゝめ－症例報告編－」
講 師：松田　憲亮 氏（国際医療福祉大学）
座 長：森　　聡 氏（株式会社 RINSHO リハビリ特化型デイサービスクレリハ）

【ランチタイムセミナー１】12：10～13：10

テーマ「がん理学療法を再考する－理学療法士はがんとどう向き合い何をすべきか－」
講 師：広田　桂介 氏（久留米大学病院）
講 師：矢木健太郎 氏（聖マリア病院）
講 師：音地　　亮 氏（北九州市立医療センター）
座 長：鈴木　裕也 氏（製鉄記念八幡病院）

【ランチタイムセミナー２】12：10～13：10

テーマ「超高齢社会における理学療法の再考－加齢性変化を理解した理学療法介入とは－」
講 師：齊藤　貴文 氏（専門学校麻生リハビリテーション大学校）
講 師：松﨑　英章 氏（福岡みらい病院）
講 師：髙野　吉朗 氏（国際医療福祉大学）
座 長：吉田　純一 氏（新吉塚病院）

【シンポジウム１】14：30～16：30

テーマ「下肢関節疾患の再考－病態×バイオメカニクス－」
講 師：藤田　　努 氏（九州大学病院）
講 師：緒方　悠太 氏（久留米大学医療センター）
講 師：高橋　　誠 氏（産業医科大学若松病院）
座 長：谷口　隆憲 氏（福岡国際医療福祉大学）
座 長：谷口　侑紀 氏（久留米大学医療センター）

【シンポジウム２】14：30～16：30

テーマ「理学療法の再考Ⅰ－これまでとこれから－」
講 師：河上　敬介 氏（日本基礎理学療法学会 副理事長）
講 師：髙村　浩司 氏（日本神経理学療法学会 理事）
講 師：小塚　直樹 氏（日本小児理学療法学会 理事長）
講 師：松田　雅弘 氏（日本支援工学理学療法学会 理事長）
講 師：大垣　昌之 氏（日本地域理学療法学会 理事）
講 師：牧迫飛雄馬 氏（日本予防理学療法学会 副理事長）
座 長：遠藤　正英 氏（桜十字グループ 福岡事業本部）
座 長：山内　康太 氏（製鉄記念八幡病院）

【シンポジウム３】14：30～16：30

テーマ「理学療法の再考Ⅱ－これまでとこれから－」
講 師：対馬　栄輝 氏（日本運動器理学療法学会 理事長）
講 師：相澤　純也 氏（日本スポーツ理学療法学会 理事長）
講 師：玉木　　彰 氏（日本呼吸理学療法学会 理事長）
講 師：高橋　哲也 氏（日本循環器理学療法学会 理事長）
講 師：井垣　　誠 氏（日本糖尿病理学療法学会 理事長）
講 師：日髙　正巳 氏（日本理学療法教育学会 理事長）
座 長：北村　匡大 氏（福岡和白リハビリテーション学院）
座 長：森口　晃一 氏（西尾病院）

式　次　第

開会式

9：30～9：50　　LIVE配信

１．開会の辞　　学会長　河上　淳一

２．来賓紹介

３．来賓祝辞

４．会長挨拶

　　福岡県理学療法士会会長　　西浦　健蔵

演題表彰・時期学会長挨拶・閉会式

16：40～17：00　　LIVE配信

　　演題表彰

　　閉会の辞　　学会長　河上　淳一

特別講演1

整形外科疾患の再考
－バイオメカニクスの知識を患者に活かす－

講師：東北大学病院リハビリテーション部　村木　孝行 氏

座長：九州栄養福祉大学　河上　淳一 氏

■職歴

1998年4月－2003年3月　東海大学医学部付属病院 理学療法士
2009年4月－現在　東北大学病院 リハビリテーション部 理学療法士
2009年4月－現在　東北大学大学院 医科学研究科 非常勤講師
2018年4月－現在　首都大学東京 客員教授（兼任）
2021年4月－現在　東北大学病院 リハビリテーション部（技師長）

■学歴

1994年4月－1998年3月　北里大学 医療衛生学部 リハビリテーション科
2003年4月－2005年3月　札幌医科大学大学院 保健医療学研究科 博士課程 前期
2005年4月－2007年3月　札幌医科大学大学院 保健医療学研究科 博士課程 後期
2007年4月－2009年3月　米国メイヨークリニックバイオメカニクス研究室 研究員

■主な資格

1998年3月　理学療法士
2007年3月　博士号（理学療法学）

■関連論文

原著論文（英文）

1. Ishikawa H, Muraki T, Morise S, Kurokawa D, Yamamoto N, Itoi E, Izumi SI. Changes in shoulder muscle activities and glenohumeral motion after rotator cuff repair: an assessment using ultrasound real-time tissue elastography. J Shoulder Elbow Surg. 2021 Nov; 30(11): 2577-2586.
2. Ishikawa H, Muraki T, Morise S, Yamamoto N, Itoi E, Izumi SI. Differences in scapular motion and parascapular muscle activities among patients with symptomatic and asymptomatic rotator cuff tears, and healthy individuals. JSES Int. 2020 Dec;15;5(2): 238-246.
3. Kurokawa D, Muraki T, Ishikawa H, Shinagawa K, Nagamoto H, Takahashi H, Yamamoto N, Tanaka M, Itoi E. The Influence of Pitch Velocity on Medial Elbow Pain and Medial Epicondyle Abnormality Among Youth Baseball Players. Am J Sports Med. 2020 Jun; 48(7): 1601-1607.
4. Honda K, Sekiguchi Y, Muraki T, Izumi SI. The differences in sagittal plane whole-body angular momentum during gait between patients with hemiparesis and healthy people. J Biomech. 2019; 86: 204-209.
5. Suzuki Y, Muraki T, Sekiguchi Y, Ishikawa H, Yaguchi H, Suzuki Y, Morise S, Honda K, Izumi SI. Influence of thoracic posture on scapulothoracic and glenohumeral motions during eccentric shoulder external rotation. Gait Posture. 2019; 67:207-212.
6. Sekiguchi Y, Muraki T, Owaki D, Honda K, Izumi SI. Regulation of quasi-joint stiffness by combination of activation of ankle muscles in midstances during gait in patients with hemiparesis. Gait Posture. 2018; 62:378-383.
7. Shiota Y, Yamamoto N, Kawakami J, Nagamoto H, Muraki T, Kaneko K, Itoi E. Contact pressure of the coracoacromial arch in shoulders with joint contracture: A cadaveric study. J Orthop Sci. 2017; 22: 1031-1041.
8. Nagamoto H, Yamamoto N, Shiota Y, Kawakami J, Muraki T, Itoi E. Transosseous-equivalent repair with and without medial row suture tying: a cadaveric study of infraspinatus tendon strain measurement. JSES Open Access. 2017 Jun 28; 1(2): 104-108.
9. Morise S, Muraki T, Ishikawa H, Izumi SI. Age-related changes in morphology and function of scapular muscles in asymptomatic people. PM&R. 2017; 9(9): 892-900.
10. Kurokawa D, Yamamoto N, Ishikawa H, Nagamoto H, Takahashi H, Muraki T, Tanaka M, Sato K, Itoi E. Differences in humeral retroversion in dominant and nondominant sides of young baseball players. J Shoulder Elbow Surg. 2017; 26(6): 1083-1087.

■社会活動

NPOスポーツ医科学ネットワーク 理事（主な活動：スポーツ検診事業）
東北放送ラジオ Good morning アサイチ体操

特別講演2

認知機能に対する理学療法の再考

講師：群馬大学大学院保健学研究科　山上　徹也 氏

座長：専門学校麻生リハビリテーション大学校　松﨑　哲治 氏

■職歴

2001年　4月　伊勢崎福島病院 リハビリテーション科
2007年12月　群馬大学医学部保健学科理学療法学専攻 助教
2010年　4月　高崎健康福祉大学保健医療学部理学療法学科 講師
2016年　1月　群馬大学大学院保健学研究科リハビリテーション学講座
准教授（現職）

■学歴

2001年　3月　群馬大学医学部保健学科理学療法学専攻卒業
2003年　3月　群馬大学大学院医学系研究科保健学専攻博士前期課程修了
2007年　3月　群馬大学大学院医学系研究科保健学専攻博士後期課程修了

■主な資格

専門理学療法士（生活環境支援）、認知症ケア上級専門士、
認知症予防専門士指導者

■関連論文

・山口晴保（編）：認知症の正しい理解と包括的医療・ケアのポイント 第3版. 協同医書出版, 2016.
・Yamagami T, et al: Influence of concomitant dementia on FIM gain in convalescent rehabilitation: Strategies to provide effective rehabilitation for patients with concomitant dementia. Japanese Journal of Comprehensive Rehabilitation Science, 9: 52-58, 2018.
・Yamagami T, et al: Obtaining Information from Family Caregivers is Important to Detect Behavioral and Psychological Symptoms and Caregiver Burden in Subjects with Mild Cognitive Impairment. Dementia and Geriatric Cognitive Disorders Extra, 6(1): 1- 9, 2016.
・Yamagami T, et al: A randomized controlled trial of brain-activating rehabilitation for elderly participants with dementia in residential care homes. Dementia and geriatric cognitive disorders extra, 2(1): 372-380, 2012.

■社会活動

日本認知症予防学会 評議員、日本地域理学療法学会 評議員

教育講演

理学療法研究のすゝめ
－症例報告編－

講師：国際医療福祉大学福岡保健医療学部　理学療法学科　松田　憲亮 氏
座長：株式会社 RINSHO リハビリ特化型デイサービスクレリハ　森　聡 氏

■職歴
柳川リハビリテーション病院リハビリテーション部
（2002年－2009年）
国際医療福祉大学福岡リハビリテーション学部理学療法学科助教
（2009年－2011年）
国際医療福祉大学福岡リハビリテーション学部理学療法学科講師
（2011年－2013年）
国際医療福祉大学福岡保健医療学部理学療法学科講師（名称変更）
（2013年－2019年）
国際医療福祉大学福岡保健医療学部理学療法学科准教授
（2020年－現在）
国際医療福祉大学大学院（理学療法学分野、医療教育福祉管理分野）
（2014年－現在）

■学歴
長岡技術科学大学工学部生物機能工学課程修了（1993年）
長岡技術科学大学工学部生物機能工学専攻修了（1995年）
専門学校 柳川リハビリテーション学院卒業（2002年）
佐賀大学医学系研究科博士課程医科学専攻修了（2017年）

■主な資格
運動器専門理学療法士 介護予防推進リーダー 地域ケア会議推進リーダー
フレイル対策推進マネジャー

■関連論文

1）K Matsuda, N Hamachi, T Yamaguchi, et al. : A Path Analysis of the Interdependent Relationships between Life Space Assessment Scores and Relevant Factors in an Elderly Japanese Community. J. Phys. Ther.Sci.：31, 326 - 331, 2019.
2）K Matsuda, T Ariie, R Okoba, et al. : Investigation of factors associated with low back pain in young adults. J. Asi. Reha. Sci.4(1):1-5, 2021.
3）松田憲亮, 池田翔, 小林薫. : 前期女性高齢者の身体的プレフレイルにおける注意機能および認知機能の影響力. 理学療法福岡　34：96-101, 2021.

■社会活動
福岡県理学療法士会筑後支部学術部長（2013－2016）
日本理学療法士協会ガイドライン作成SR肘班 班長（2018－2020）
理学療法科学査読委員（2015－現在）理学療法福岡査読委員（2017－現在）

ランチタイムセミナー1

がん理学療法を再考する
－理学療法士はがんとどう向き合い何をすべきか－

講師：広田　桂介 氏・矢木健太郎 氏・音地　亮 氏
座長：製鉄記念八幡病院　鈴木　裕也 氏

今年のランチタイムセミナーは、従来のランチタイムセミナーとは趣を変えて、カフェで雑談するイメージで堅苦しくなく、ご飯を食べながらがん理学療法に対する話題を皆で共有するスタイルで行ってみます。

さて、「がん」は皆さんご存知の通り、我が国における死因の第一位を占める疾患です。

しかし、がん治療における進歩は著しく、診断精度の向上による早期発見、内視鏡の導入、化学療法の進歩、放射線治療の進歩、緩和ケアの充実により「がん」は付き合っていく疾患に変わりつつあります。

このような社会的背景の中、我々理学療法士はどのようにがん患者と向き合い、何を行っていくべきでしょうか？また、何ができるのでしょうか？

そのような疑問に対するヒントになるような、現在のがん理学療法のトレンド・臨床での困難例やちょっとした工夫・心に残る患者さんの話などを、がん理学療法の経験豊富な先生方と座談会形式で話題提供してみたいと考えておりますので、気軽にご参加してください。

（鈴木　裕也）

■氏名
広田　桂介 氏

■所属
久留米大学病院リハビリテーション部

■職歴
1995年4月　医療法人親仁会みさき病院入職
1999年5月　医療法人親仁会みさき病院入職
1999年9月　久留米大学病院入職
現在に至る

■学歴
1995年3月　西日本リハビリテーション学院卒業
2007年3月　久留米大学大学院医学研究科修士課程（健康スポーツ科学）卒業
2020年3月　久留米大学大学院医学研究科博士課程（先端癌治療学）卒業

■主な資格
医学博士
がんのリハビリテーション
がんのリハビリテーション企画者
日本DMAT隊員

■関連論文
Hirota K, Matsuse H, et al. Risks of Muscle Atrophy in Patients with Malignant Lymphoma after Autologous Stem Cell Transplantation. Phys Ther Res 2021;24:69-76.
Hirota K, Kawaguchi T, et al. Profiles Associated with Sarcopenia in Hepatoma Patients Underwent Transcatheter Arterial Chemoembolization: A Data-Mining Analysis. Journal of Cahexia, Sarcopenia and Muscle-Clinical Reports 2018:1-17.
Hirota K, Kawaguchi T, et al. Clinical utility of the Liver Frailty Index for predicting muscle atrophy in chronic liver disease patients with hepatocellular carcinoma. Hepatol Res 2020;50:330-341.
広田桂介，松瀬博夫，他．血液腫瘍疾患における造血幹細胞移植後の骨格筋量変化とその要因．Jpn J Rehabil Med 2020;57:352-363.
広田桂介,川口巧,他. サルコペニア治療とマネジメント.消化器・肝臓内科.2019.5;103-110.

■社会活動
日本理学療法士協会がんリンパ浮腫研究会評議委員

ランチタイムセミナー1

■氏名
矢木　健太郎 氏

■所属
社会医療法人 雪ノ聖母会 聖マリア病院 リハビリテーション室

■職歴
2003年～　現職

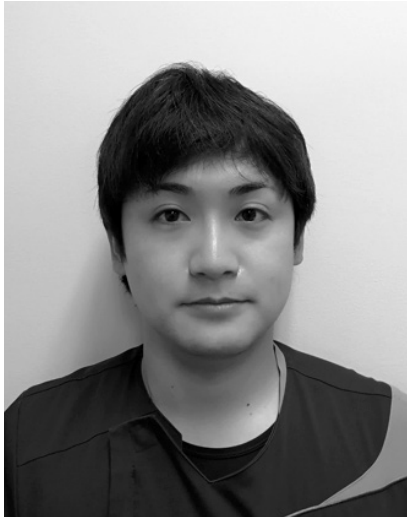
■学歴
2003年3月　国立善通寺病院附属リハビリテーション学院 理学療法学科 卒業
2008年3月　国際医療福祉大学大学院 保健医療福祉学修士取得

■主な資格
ICAAリンパ浮腫専門理学療法士

■関連論文
【原著論文】
矢木健太郎、井手睦：緩和ケア病棟におけるリハビリテーション実施患者の希望の調査および離床耐久性と予後予測スコアとの関係Palliative Care Research12巻4号 801-806.2017.

【分担執筆】
矢木健太郎（2013），3進行期・終末期を迎えた患者のがんのリハビリテーション2-5廃用症候群．島崎寛将・他編緩和ケアが主体になる時期のがんのリハビリテーション，中山書店，111-119.
矢木健太郎（2021），2.緩和ケア主体の時期のリハビリテーションを充実させるためにB理学療法士からの視点．木澤義之他編ホスピス緩和ケア白書2021がんのリハビリテーションと緩和ケア．p26-28.

■社会活動
2015年～　福岡がんのリハビリテーション研修会実行委員会 準備副委員長
2017年～　日本理学療法士協会 がん理学療法部門 部員
2018年　第24回日本緩和医療学会学術大会 WG員
2021年～　日本がん・リンパ浮腫理学療法研究会 部員・評議員



■氏名
音地　亮 氏

■所属
地方独立行政法人北九州市立病院機構 北九州市立医療センター リハビリテーション技術課

■職歴
2005年　福岡新水巻病院
宮田病院
福岡和白リハビリテーション学院
2019年　北九州市立医療センター　現在に至る

■学歴
2005年　愛媛十全医療学院 理学療法学科 卒業
2015年　九州大学大学院 人間環境学府 行動システム専攻 健康スポーツ科学コース 修士課程 修了

■主な資格
・認定理学療法士（呼吸）
・3学会合同 呼吸療法認定士
・呼吸ケア指導士

■分担執筆
・Q&Aとアウ値で学ぶ　検査・データがまるごとわかる本（慧文社　2020年発刊）
・医療現場のプロが教える　世界一わかりやすい入院の教科書（慧文社　2020年発刊）
・教育ガイドライン～離床に関する学会指導指針～（2021年発刊）

■社会活動
・公益社団法人 福岡県理学療法士会 学術局 学術誌編纂部 部長（2019年～現在）
学術局 学会部 理事（2017年～2019年）
学術局 学会部 部長（2015年～2016年）
・日本理学療法士協会 代議員（2017年～現在）
・日本がん・リンパ浮腫研究会 評議員（2021年～現在）
・第5回日本がん・リンパ浮腫理学療法研究会 準備委員（2021年～現在）
・九州理学療法士学術大会2022 in福岡 準備委員（2021年～現在）

ランチタイムセミナー2

超高齢社会における理学療法の再考
－加齢性変化を理解した理学療法介入とは－

講師：齊藤　貴文 氏・松﨑　英章 氏・髙野　吉朗 氏
座長：医療法人 相生会 新吉塚病院　吉田　純一 氏

このランチタイムセミナー2では、「超高齢社会における理学療法の再考 ―加齢性変化を理解した理学療法介入とは―」をテーマに、「高齢者」を対象とした研究の第一線でご活躍されている先生方をシンポジストとしてお招きしています。

日本は2007年に超高齢社会（高齢化率21％超）に突入しました。今後も高齢化率はさらに上昇することが予測されます。それに伴い、理学療法士が「高齢者」と関わる機会は今まで以上に増えてくることが考えられます。そこで、高齢者に多くみられる慢性疼痛、転倒、サルコペニア、フレイルに対する理学療法介入のヒントを、疫学研究から介入研究までの幅広い視点で一緒に考えてみませんか。

今回、シンポジストの先生方には、これまでの研究結果や最近の動向などを座談会形式で紹介して頂きますので、昼食を取りながらラジオを聴くような感覚で是非ご参加ください。

（吉田　純一）

■氏名
齊藤　貴文 氏

■所属
麻生リハビリテーション大学校
九州大学基幹教育院 学術研究者
九州大学病院 集学的痛みセンター

■職歴
2001年　医療法人 喜和会 喜多村クリニック
2007年　麻生リハビリテーション大学校理学療法学科専任教員

■学歴
2001年　宮崎リハビリテーション学院 卒業
2018年　九州大学人間環境学府行動システム専攻健康・スポーツ科学コース博士課程修了博士（人間環境学）

■主な資格
認定理学療法士（運動器）
介護予防推進リーダー
からだ・運動器の痛み専門医療者

■関連論文

1．齊藤貴文，崎田正博，松尾恵理，野藤悠，森山善彦，長野真弓，熊谷秋三，古賀崇正（2011）．高齢者における膝痛の強度と罹患側の違いがメンタルヘルスに及ぼす影響．ヘルスプロモーション理学療法研究，1: 21-28.
2．齊藤貴文，崎田正博，森山善彦，西内久人，古賀崇正，熊谷秋三（2013）．歩行活動と生活活動を含めた総身体活動量と運動器疼痛との関連性について－地域在住高齢者を対象として－．日本運動器疼痛学会誌，5: 20-27.
3．齊藤貴文，崎田正博，森山善彦，西内久人，古賀崇正，熊谷秋三（2013）．3軸加速度計による生活活動量および座業時間と膝痛有訴率との関連性－地域在住高齢者を対象として－．日本運動器疼痛学会誌，5: 116-123.
4．齊藤貴文，崎田正博，熊谷秋三（2015）．身体活動と座位行動の慢性腰痛に対する組み合わせリスク．体力科学，64: 435-442.
5．齊藤貴文，崎田正博，熊谷秋三（2017）．高齢者における運動器慢性疼痛の身体活動疫学．健康科学，39: 19-39.
6．齊藤貴文，崎田正博，熊谷秋三（2019）．痛みの数と手段的日常生活動作および心理的因子との関連性．Pain Rehabilitation，9: 34-41.
7．齊藤貴文，崎田正博，熊谷秋三（2020）．腰痛の強さおよび他の部位の痛みの数の組み合わせと心理的因子との関連性．日本運動器疼痛学会誌，12: 3-10.

■社会活動
福岡県理学療法士会 代議員
日本理学療法士協会 代議員
福岡市介護認定審査委員
大野城市PTCS活動ランドセルクラブ代表

ランチタイムセミナー2

■氏名
松﨑　英章 氏

■所属
福岡みらい病院 リハビリテーションセンター

■職歴
2012年　新中間病院 入職
2016年　福岡みらい病院 入職

■学歴
2012年　　九州リハビリテーション大学校 卒業
2020年　　九州大学大学院 人間環境学府行動システム専攻 修士課程修了
2020年～　九州大学大学院 人間環境学府行動システム専攻 博士後期課程

■主な資格
認定理学療法士（健康増進・参加）
修士（人間環境学）

■関連論文
高齢入院患者に対する低強度運動の安全性と有効性：日本ヒューマンケア・ネットワーク学会誌（2019年）
地域在住自立高齢者における中高強度身体活動と転倒の関連性はバランス機能に影響される：理学療法学（2021年）

■社会活動
2019年～　福岡県理学療法士会公益事業推進部 部長
2021年～　日本予防理学療法学会 評議員

■氏名
髙野　吉朗 氏

■所属
国際医療福祉大学福岡保健医療学部理学療法学科/国際医療福祉大学大学院 教授

■職歴
1993年　社会福祉事業団四天王寺悲田院
1995年　介護老人保健施設御船清流園
2002年　帝京大学福岡医療技術専門学校理学療法学科
2006年　帝京大学福岡医療技術学部理学療法学科
2013年　国際医療福祉大学福岡保健医療学部理学療法学科

■学歴
1993年　熊本リハビリテーション学院理学療法学科卒業
2002年　佛教大学社会学部社会福祉学科卒業（社会学士）
2006年　久留米大学大学院医学研究科（修士課程）医科学専攻修了
　　（修士：医科学）
2010年　久留米大学大学院医学研究科（博士課程）個別最適医療系専攻修了
　　（博士：医学）

■主な資格
専門理学療法士（生活環境支援・物理療法）

■関連論文
1）Electrically stimulating antagonist muscles improves strength in older men. Gerontechnology.Vo13.No4.2015.
2）A New Training for Older Adults Using Combined Neuromuscular Electrical Stimulation and Volitional Contraction: A Pilot Study. Kurume Med J.Vol62.No3-4.2015.
3）高齢者のサルコペニア対策、EARLY MOBILIZATION JOURNAL. Vol08.2021
他、論文53編.

シンポジウム1

下肢関節疾患の再考
－病態×バイオメカニクス－

講師：藤田　努 氏・緒方　悠太 氏・高橋　誠 氏

座長：久留米大学医療センター　リハビリテーションセンター　谷口　侑紀 氏
福岡国際医療福祉大学　医療学部　理学療法学科　谷口　隆憲 氏

理学療法の発展において、バイオメカニクスがその礎であると言っても過言ではない。バイオメカニクスの知識は動作分析や歩行分析だけでなく、関節疾患の病態や臨床症状の解釈においても必須である。しかしながら、苦手意識を持つ理学療法士は多く、理学療法の中でバイオメカニクスの知見をどのように応用するべきかを深く理解している理学療法士は多くはいないのではなかろうか。

本シンポジウムでは、主に下肢関節に関して3名の講師に臨床の場面で実施されているバイオメカニクスに関する臨床研究や知見をどのように理学療法に応用しているかを御講演頂く。シンポジウムを通して、下肢関節疾患をバイオメカニクスの観点から再考し、明日からの理学療法に深みを持たせる知識や見解を共有したい。

（谷口　侑紀、谷口　隆憲）

股関節疾患の病態×バイオメカニクス

講師：九州大学病院　藤田　努 氏

日本理学療法士協会は、当該ウェブサイトにおいて「理学療法士は一言でいうならば動作の専門家です」と説いている。わが国民に向けた理学療法の解説から直接引用した一文であるが、この“動作”とは何であろうか？

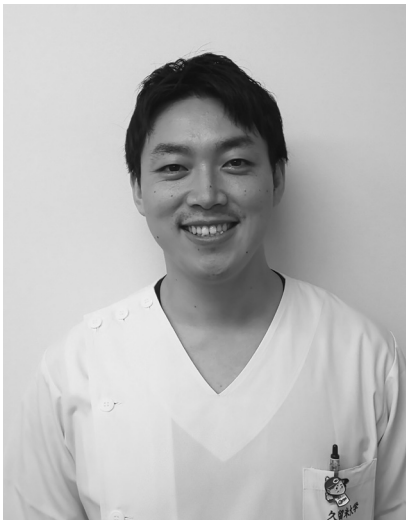
Evidence-Based Medicineの観点から、より科学的に“動作”を捉えるために、計測機器の発達や限界と共に、生物学的問題に力学の手法を用いるバイオメカニクスの学際的発展がなされてきた。今回、我々が取り組んでいる臨床研究の中でも、人工股関節置換術後のトレンデレンブルグ歩行の病態に焦点を当て、“動作”を運動学（キネマティクス）と運動力学（キネティクス）からなるバイオメカニクスの視点から論述する。2000年以降の医療機器や手技の革新により、理学療法においても、術後早期の疼痛緩和や歩行をはじめとしたADL再獲得が可能となり、更なる質的改善が求められる。過去の先行研究においても、速やかな時間距離因子の改善が認められる一方で、歩容異常の遷延化を生じるといった報告が散見され、臨床上での重要な問題点になることも少なくない。本シンポジウムを通じ、歩行動作の観察から求心性収縮や遠心性収縮の筋収縮様式の分析まで一連の理学療法を再考したい。

■職歴
2009年 4月　医療法人福西会 福西会病院 リハビリテーション科 入職
2013年12月　医療法人福西会 福西会病院 リハビリテーション科 退職
2014年 1月　九州大学病院 リハビリテーション部 入職

■学歴
2007年 3月　医療福祉専門学校 緑生館 理学療法学科 卒業
2016年 4月　久留米大学大学院医学研究科 リハビリテーションバイオメカニクス学 修士課程 入学
2017年 3月　久留米大学大学院医学研究科 リハビリテーションバイオメカニクス学 修士課程 修了
2021年 4月　九州大学大学院医学系学府医学専攻 構造機能医学 博士課程 入学

■主な資格
修士（医科学）、運動器認定理学療法士、心臓リハビリテーション指導士、3学会合同呼吸療法認定士

■関連論文
1. Fujita T, Hamai S, Shiomoto K, Okazawa K, Nasu Y, Hara D, Harada S, Motomura G, Ikemura S, Fujii M, Kawahara S, Kawaguchi K, Nakashima Y (in press). Analysis of factors influencing patient satisfaction after total hip arthroplasty in a Japanese cohort: A significant effect of postoperative physical activity. J Phys Ther Sci.
2. 藤田努, 水内秀城, 岡澤和哉, 奈須勇樹, 川口謙一, 中島康晴. 変形性膝関節症患者の荷重応答期における動的膝関節スティフネスと筋収縮様式の関連性. 理学療法福岡(34) 102-108, 2021.
3. 藤田努, 中島康晴. 思春期特発性側弯症術後における歩行キネマティクスと筋電図解析. Japanese Journal of Clinical Biomechanics 41: 35-41, 2020.



膝関節疾患の病態×バイオメカニクス

講師：久留米大学医療センター　緒方　悠太 氏

力学的ストレスと整形外科疾患は密接に関連しており、これまで膝関節の外反が膝前十字靭帯損傷の受傷機転となることや外部膝関節内反モーメントが変形性膝関節症と関連することが報告されている。こうした知見を元に“良い動作”へと近づけることが理学療法の目標の一つとなるが、“良い動作”の基準は非常に曖昧である。例えば、外部膝関節内反モーメントを減じるためにtoe-out歩行を行うと、脛骨の異常な回旋運動が生じ、関節軟骨の変性を早める可能性がある。個々の病態と動作が及ぼす力学的ストレスを考慮しながら、適切な運動療法を選択していくことが臨床では重要である。

除痛が理学療法の一つの目標となることは非常に多く、様々な疾患において理学療法が症状を軽減することが報告されている。しかしながら、理学療法によって力学的環境がどの様に変化し、どの様なメカニズムで症状が改善するのかを臨床的に示した知見は極めて少ない。本シンポジウムでは我々が取り組んでいる半月板損傷患者を対象とした臨床研究から、半月板損傷患者に対する理学療法介入が膝関節へ与える生体力学的なストレスの変化と、これらの知見を元にした運動療法への応用に関して報告する。

■職歴
2014年6月　広島大学大学院医歯薬保健学研究科 ティーチング･アシスタント 採用
2016年3月　広島大学大学院医歯薬保健学研究科 ティーチング･アシスタント 退職
2016年4月　久留米大学医療センター リハビリテーションセンター 入職

■学歴
2014年3月　広島大学 医学部保健学科 理学療法学専攻 卒業
2014年4月　広島大学大学院 医歯薬保健学研究科 博士課程前期 保健学専攻 入学
2016年3月　広島大学大学院 医歯薬保健学研究科 博士課程前期 保健学専攻 修了
2021年4月　久留米大学大学院 医学研究科博士課程 個別最適医療系専攻 入学

■主な資格
修士（保健学）、運動器認定理学療法士

■関連論文
Ogata, Y., Anan, M., Takahashi, M., Takeda, T., Tanimoto, K., Sawada, T., Shinkoda, K., Relationships Between Trunk Movement Patterns During Lifting Tasks Compared With Unloaded Extension From a Flexed Posture. J. Manipulative Physiol. Ther. 41, 189–198. doi:10.1016/j.jmpt.2017.09.007, 2018.

足部・足関節疾患の病態×バイオメカニクス

講師：産業医科大学若松病院　高橋　誠 氏

足部・足関節は、衝撃吸収・体重支持・荷重伝達などの柔軟性と剛性という相反した機能を発揮し効率的な歩行を行うことができる。歩行障害では過回内足が膝関節への力学的ストレスを増加させたり、股・膝関節のマルアライメント・可動性異常が足関節・足部に影響を及ぼすことが報告されている。このような足部・足関節と近位関節のバイオメカニクスの知見は動作解析装置等の発展に伴い解明されてきており、歩行障害を考える上で非常に有用な手段となっている。

実際の臨床においては、障害部位の特定や疼痛が誘発されるメカニズムを分析する必要があり、その過程でバイオメカニクスの知識は病態を理解し疼痛出現メカニズムを推測する上でとても有用になる。また、それだけではなく治療効果の判定にもバイオメカニクスの知識は重要となる。しかし、論文で得られたバイオメカニクスの知識は解釈が難解で、それらをどのように臨床に活かすのか悩むセラピストも多いのではないだろうか。本シンポジウムでは歩行における足関節・足部のバイオメカニクスについて整理し、実際の症例においてバイオメカニクスの知識をどのように評価や運動療法に応用するかを提示する。

■職歴
2000年　医療法人 雪の聖母会 聖マリア病院 入職
2003年　医療法人 雪の聖母会 聖マリア病院 退職
2004年　医療法人 和仁会 福岡和人会病院 入職
2012年　医療法人 和仁会 福岡和人会病院 退職
2012年　学校法人 産業医科大学若松病院 入職

■学歴
1996年　国際医療福祉大学 保健学部 理学療法学科 入学
2000年　国際医療福祉大学 保健学部 理学療法学科 卒業

■主な資格
認定理学療法士（スポーツ理学療法士）

■関連論文
Tateishi S, Onishi Y, Suzuki H, Takahashi M, Shiraishi J, Larson CM, Uchida S. Arthroscopic anterior inferior iliac spine decompression does not alter postoperative muscle strength. Knee Surg Sports Traumatol Arthrosc. 2020 Sep;28(9):2763-2771.

シンポジウム2

理学療法の再考Ⅰ
－これまでとこれから－

講師：河上　敬介 氏・髙村　浩司 氏・小塚　直樹 氏・松田　雅弘 氏・大垣　昌之 氏・牧迫飛雄馬 氏

座長：桜十字グループ 福岡事業本部　遠藤　正英 氏
製鉄記念八幡病院　山内　康太 氏

一般社団法人　日本基礎理学療法学会（副理事長）
河上　敬介 氏

「日本基礎理学療法学会のこれまでとこれから」

当学会は二つの組織の流れを汲む。1996年若手研究者を中心として設立された「理学療法の医学的基礎研究会」と、1997年日本理学療法士協会（以下、協会）専門領域研究部に設置された「理学療法基礎系研究部会」である。前者は2011年に日本学術会議協力学術研究団体に登録され、2021年後者の協会からの独立と同時に法人学会として融合し、名実ともに学術団体として歩み始めた。本学会は、疾患領域に基づく縦断的な研究体系に対して、理学療法学における横断的かつ学際的な研究体系を構築し、理学療法を支える基盤的学問体系の創造を目的とする。そのために、理学療法の科学的検証に資する研究成果を広く発信し、研究者同士が刺激しあい、切磋琢磨できる環境を提供してゆきたい。最終的な使命としては世界の人々の健康と幸福へ貢献することだと考えている。

一般社団法人　日本神経理学療法学会（理事）
髙村　浩司 氏

「日本神経理学療法学会のこれまでとこれから」

日本神経理学療法学会は、分科学会の時代から重ねてきた学術大会が来年度で20回目を迎えます。その他これまでもサテライトカンファレンスや参加型フォーラムSIGsなどを企画し中枢神経障害に対し真摯に向き合ってきました。

日本神経理学療法学会が学術団体としてさらに成熟していくためには、広く社会にとって意義のある臨床、研究、教育活動を追求していかなければなりません。そのためには、理学療法が社会にどのように貢献できるかを探究していくことが重要と思われます。神経理学療法は、中枢神経障害を有する対象患者に対して、運動機能の観点から退院後の生活像を推測、改善、達成するための学問体系を構築すべきだと考えます。今後は、先人たちが重ねてきた豊富な経験を活かしながらも、中枢神経障害の病態や理学療法のあり方について言語化していく責務とともに、エビデンスのある効果的な技術を革新することに寄与していく所存です。

一般社団法人　日本小児理学療法学会（理事長）
小塚　直樹 氏

「小児理学療法学会のこれまでとこれから」

私が理学療法士として活動を始めた1980年代、小児理学療法の対象は脳性麻痺が中心であり、治療者側は治療手技への関心が高く、保護者側は立てる/歩けることへの関心が高く、何よりも運動機能の改善が求められた時代でした。客観的な評価が乏しかったこの時期を経て2000年に入り、ICFの概念に基づく小児リハビリテーションの考え方へと変革しました。QOL重視、EBPT原則が今の時代の小児理学療法の基盤になっています。現在、小児理学療法の評価は機能面にとどまらず、多方面にわたり整備され精緻化されています。また対象もハイリスク新生児や発達障害児者と人生を俯瞰した多様性への対応が求められる時代となりました。当学会ではこのニーズに応えるべく目標を設定し、結果が明確に示せる小児理学療法の提供を使命と考えております。

シンポジウム2

一般社団法人　日本支援工学理学療法学会（理事長）
松田　雅弘 氏

「日本支援工学理学療法学会のこれまでとこれから」

本学会は、どの疾患、病期においても必要とされる治療機器、補装具、福祉用具に加えて、生活環境支援として住宅改修、街づくりなど、対象者のQOLの向上とWell-beingを実現するための理学療法支援を専門とする。科学技術の進歩にともなってこれらの領域はさらに発展することが見込まれ、様々な専門家と協働してその技術を理学療法のなかで適切に活用していくために研究などの活動が重要となる。それに加え、ロボットやICT、AIなどの情報技術によって私たちの理学療法の効果をあげることが期待され、その研究も加速させていかなくてはいけない。未来の理学療法のシステム、対象者の支援の拡充、インクルーシブな街づくりなどを視野に入れ、多くの対象者に単純な医療モデルだけの解決ではなく、様々な支援の方法を模索して発展させていきたい。

一般社団法人　日本地域理学療法学会（理事）
大垣　昌之 氏

「日本地域理学療法学会のこれまでとこれから」

「地域理学療法＝生活期の理学療法」と理解している理学療法士は少なくない。地域理学療法の対象者は地域の方々であり、医療機関で関わる患者もその対象者となる。地域理学療法の中では、医療機関も地域資源の一つと考え、すべての病期を対象とし、退院後の生活や社会参加を見据えた介入が望まれる。

地域理学療法学とは、「動作や活動への多面的な働きかけにより人々が地域でのくらしを主体的につくりあげられるよう探求する学問」と定義（日本地域理学療法学会2019年）し、その実践領域を、個別－集団・間接－直接という二つの機軸を基に4領域に整理している。この多面的な領域への働きかけを通して、人々が地域でのくらしを主体的につくりあげるように取り組むことが重要であり、学問としての地域理学療法の確立には、積み上げた暗黙知から形式知を構築していく必要がある。

一般社団法人　日本予防理学療法学会（副理事長）
牧迫　飛雄馬 氏

「日本予防理学療法学会のこれまでとこれから」

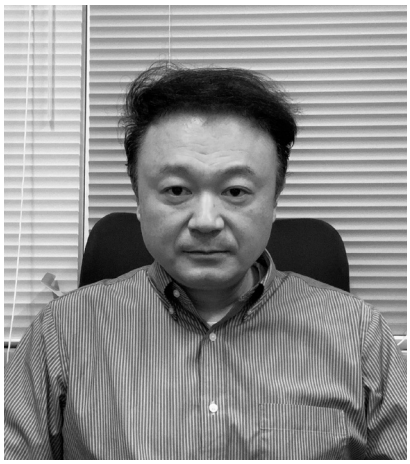
日本予防理学療法学会は、2021年4月に一般社団法人として新たな一歩を踏み出した。日本理学療法学会では、予防理学療法を「国民がいつまでも『参加』し続けられるために、障がいを引き起こす恐れのある疾病や老年症候群の発症予防と再発予防を含む身体活動について研究する学問領域である」と定義した（2017年、予防理学療法学要論）。

日本予防理学療法学会では、疾病や障がい予防に関しての課題の本質を明らかにし、「参加」を帰結とした国民の福祉に貢献することを目指す。そのため、理学療法士のみならず、隣接または異分野の研究者との協働も見据えて学術活動を促進する。シンポジウムでは本学会の活動状況や今後の企画を含めた将来ビジョンを示す。2021年11月末時点で1056名（一般会員、専門会員A・B）が登録している。

シンポジウム3

理学療法の再考Ⅱ
－これまでとこれから－

講師：対馬　栄輝 氏・相澤　純也 氏・玉木　彰 氏・高橋　哲也 氏・井垣　誠 氏・日髙　正巳 氏
座長：福岡和白リハビリテーション学院　北村　匡大 氏
西尾病院　森口　晃一 氏



一般社団法人　日本運動器理学療法学会（理事長）
対馬　栄輝 氏

「日本運動器理学療法学会のこれまでとこれから」

運動器障害に対する理学療法は本邦でも扱う件数が多く、歴史的に見ても古くから対象とされてきた。日本運動器理学療法学会（以下、運動器学会）では発足から法人化に至るまで、多くの会員数で構成されており、学術大会を中心とした活動公表の場を提供してきた。

このたびの法人化に至り、より一層の学術推進活動に力を入れていく必要性を肝に銘じ、学術大会の開催はもとより、臨床・症例研究推進事業の企画、他学会との連携による学術団体地位の向上、広く一般を対象とした社会貢献の場を、会員が主体となって積極的に取り組める体制を整える方針で前進する予定である。わずかな時間であるが、本学会の抱負について共感いただき、会員の皆様のご協力が得られることを切に願う次第である。

一般社団法人　日本スポーツ理学療法学会（理事長）
相澤　純也 氏

「日本スポーツ理学療法学会のこれまでとこれから」

本学会は、スポーツ理学療法に関する基礎・臨床研究の推進、関係分野との学術的交流や研究内容に関する包括的検討およびその効果と根拠の国内外への発信、理学療法とスポーツの発展に寄与することを趣旨に設立されました。2013年に分科学会として独立し、2021年度に法人化されました。法人学会は2021年12月時点で、理事15名、監事1名、8常設委員会（委員38名）、評議員33名で組織され、会員数は専門会員A335名、一般会員525名、学生会員17名、計877名（2021年12月時点）となっています。今後は、組織、財務基盤の安定化とともに、下記の点に焦点を当て会員の皆様のスポーツ理学療法に関する活動の支援や環境改善を推進し、社会の健全性や持続可能性の向上に寄与すべく公平公正に会を運営していきます。福岡県理学療法士会の皆様のご参画を心よりお待ちしております。

・国際スポーツ理学療法学会コンピテンシーに関する科学的探究、教育、臨床・実践の標準化および推進
・国際認定スポーツ理学療法士（仮称）資格導入に関する調整と加速
・スポーツ理学療法を取り巻くデータの可視化と中長期的目標設定と評価

一般社団法人　日本呼吸理学療法学会（理事長）
玉木　彰 氏

「日本呼吸理学療法学会のこれまでとこれから」

本邦における呼吸理学療法の歴史は古く、今から55年以上前に慢性肺気腫患者に対する呼吸訓練や運動療法などのリハビリテーションが「日本胸部臨床」という雑誌に紹介されている。あれから半世紀以上経過した現在、呼吸理学療法はどの程度発展しただろうか？呼吸理学療法は慢性閉塞性肺疾患（COPD）を中心に多く示されているものの、本邦において十分に実施されているとは言いがたい。その理由として、現在までに明らかとなっている呼吸理学療法のエビデンスについて多職種を含めまだ十分に周知できていないこと、そしてエビデンスが明確となっていない疾患（領域）があることなどが考えられる。そのためこれからの日本呼吸理学療法学会では、呼吸理学療法の新たなエビデンス構築のための研究および、エビデンスを臨床で広く使ってもらうための様々な啓発活動を積極的に推進することが使命であると考えている。

シンポジウム3

一般社団法人　日本循環器理学療法学会（理事長）
高橋　哲也 氏

「日本循環器理学療法学会のこれまでとこれから」

日本循環器理学療法学会は2013年に「日本心血管理学療法学会」としてスタートし、今回の法人化にあわせて2021年4月に「日本循環器理学療法学会」と改名、一般社団法人として新たなスタートを切った。私たちはJSPT VISION 2025の重点項目「理学療法評価の標準化」、「学会が主体となった研究」に遵守し、多施設登録研究「高齢心不全患者のフレイル実態調査」を開始した。2021年10月現在、37都道府県、94施設、約6,000例が登録され、今後2年間の前向き調査を進めていく予定である。学術大会に加え、機関誌（日本循環器理学療法学）の発行、循環器理学療法のミニマムスタンダードの作成等、循環器病対策推進基本計画に基づく啓発活動、若手研究者（U40）の人材育成、国際活動、広報活動など積極的な学会活動を行い、循環器理学療法学の探求、学術成果の社会への発信、職能活動との連携を進めていく予定である。

一般社団法人　日本糖尿病理学療法学会（理事長）
井垣　誠 氏

「日本糖尿病理学療法学会のこれまでとこれから」

糖尿病患者に対する理学療法は、運動は血糖値を低下させるというエビデンスのもとに発展してきた。どのような運動方法が有効であるのか、さまざまな評価指標で検証されてきた経緯がある。近年、糖尿病がもたらす細小血管症、大血管症によって多くの糖尿病患者は身体機能低下を有することが明らかになった。また、患者の高齢化に伴ってフレイル・サルコペニアの問題も注目されている。したがって本学会としては血糖管理だけでなく、身体機能を含めて全身的な観点で研究を進めていく。糖尿病の重症化予防施策はすでに国を挙げての取り組みになっており、メタボリックシンドロームから合併症を有する患者（透析、足病変等）に至るまで、幅広い患者に対する運動療法指導の担い手として現場の期待に応えられる人材を育成していく必要がある。

一般社団法人　日本理学療法教育学会（理事長）
日髙　正巳 氏

「日本理学療法教育学会のこれまでとこれから」

専門領域教育管理系研究部会に端を発し、分科学会としての日本理学療法教育学会を経て、一般社団法人化いたしました。本学会は、指定規則に基づいて展開される理学療法士養成教育、臨床実習を含めた臨床教育、そして、理学療法士としての生涯にわたる卒後教育（生涯学習）を3本柱として取り組む学会である。理学療法の質を考える上で、教育の質を高めることは極めて重要である。理学療法教育は、2020年4月から施行された新指定規則によって、大きな変革が求められているところである。質の高い理学療法教育を展開するための基盤となる理学療法教育研究の発展に取り組んでいきたい。将来的には、今後の指定規則改正や国家試験の出題基準の見直しの議論へも参画できるよう取り組んでいく予定である。